

彼が負ったのはわたしたちの痛み

深 見 祥 弘

奨励者紹介〔ふかみ・よしひろ〕

日本キリスト教団近江八幡教会牧師

イエスはペトロの家に行き、そのしゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。イエスがその手に触れられると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした。夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

「彼はわたしたちの患いを負い、
わたしたちの病を担った。」

(マタイによる福音書 8章 14—17 節)

コロナ禍の近江八幡教会

新型コロナウイルスの世界的な流行が始まって、一年半が過ぎました。皆さんはこの間、いろいろな制約の中で、生活をしてこられたことでしょう。

先が見えない闇の中をくぐり抜けてきましたが、ようやく行く手に小さな光を見ることができるようになりました。今はまだ、がまんをしなければならないことがたくさんあります。今朝は、私(教会)が何を希望としてコロナ禍を過ごしてきたのかを、お話ししたいと思います。

さて、私が働きをいたします近江八幡教会の様子をお話しいたします。昨年4月新型コロナウイルスの感染が拡大し、全国に緊急事態宣言が出された時、私たちの教会は緊張に包まれました。韓国の教会でクラスターが発生し、それが感染拡大につながったとのニュースを聞いたり、ヨーロッパでは教会堂を閉鎖しているとのニュースを見たりしたからです。私たちの教会の礼拝に出席する人は、高齢の方々が多いことも心配でした。1回目の緊急事態宣言の際は、教会の役員のみが礼拝堂で、教会員は家庭で礼拝を守ることにしました。

現在は、感染予防のために(密にならないように)、教会員をAとB、二つの組に分けて(30~40名)礼拝を行っています。また、礼拝は短縮の式順(45分程度)にして、讃美歌や主の祈りは、声を落として歌い祈るようにしています。そして、パンとブドウ酒(ブドウジュース)をいただく聖餐式は中止にしています。

教会行事のうち、食事の伴う行事を中止にし、食事をしない形式に変えて行っています。牧師の働きも、今までのように、ご病気の方を病院に見舞ったり、施設におられる高齢の方々を訪問したりすることができない状態です。近江八幡教会には、組会という組織があるのですが、現在は九つの組に教会員全員が属しています。組会の責任者(組長と呼びます)は、礼拝に来ることのできない方のところに、礼拝の式順や教会の消息情報を書いた週報を届けてくださいます。また、週報にはその日の説教の全文を載せていて、それを使って家庭で礼拝を守っていただくようにしています。また、礼拝の時間に礼拝の様子をライブで配信し、それを見ながら家庭などで礼拝をしていただけるようにしています。教会ホームページから

は、都合の良い時間に、動画で礼拝を見ていただけるようにしました。この間、さまざまなことを急いで準備をいたしましたので、いろいろとぼろが出てくることもありますが、その都度整えるようにしています。

三つの癒し

御言葉は、マタイによる福音書8章です。8章～9章には、九つの奇跡が、三つずつまとめられています。その一つ、8章1～17節には、三つの癒しの奇跡（重い皮膚病を患っている人が癒された話、百人隊長の僕が癒された話、そしてペトロのしゅうとめが癒された話）が書かれています。

イエスが、山上の説教（5～7章）を終えて、山から降りてこられると、重い皮膚病を患っている人が来て、イエスの前にひれ伏し「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」（8章2節）と言いました。この人が「清くすることがおできになります」と言ったのは、この皮膚病の患者を、宗教的に汚れているとする律法（ユダヤ教の法律）があったからです。すなわち、この病気になると宿営の外に住まねばなりませんし、人前に出るときには、「汚れた者」と叫ばなければなりません（レビ記13章45節）。

この人に触れるならば、触れた人も汚れるとされていたからです。ところが、イエスはひざまずくこの人に、手を差し伸べて触れ、「よろしい。清くなれ」（マタイによる福音書8章3節）と言って癒しました。

イエスがカファルナウムの町に入られると、今度はローマ軍の百人隊長が来て、彼の僕を癒してほしいと訴えました。彼が「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」（同6節）と願うと、イエスは「わたしが行って、いやしてあげよう」（同7節）と言われました。百人隊長は「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。」（同8節）と言いました。ユダヤ人は、やはり汚れの律法によって、異邦人につき合いをしたり、その住まいに入ることをしなかったからです。イエスは、「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」（同10節）「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」（同13節）と言われると、その言葉によって、僕はすぐに癒されたのでした。

イエスは、カファルナウムのペトロの家に入りました。イエスはこの弟子の家を休息と伝道の拠点にしていたのです。イエスは、そこでペトロのしゅうとめが、熱を出して寝込んでいるのを見ました。寝込んでいるとありますので、重い病気の熱であったと考えられます。イエスがしゅうとめの手に触れると、熱が下がりました。癒されたしゅうとめは、起き上がると、感謝してイエスをもてなしました。夕暮れになると、人々が病人や悪霊に取りつかれた人を、イエスのもとに連れてきました。イエスは、言葉で悪霊を追い出し、病人を癒しました。なぜ、人々は、夕暮れを待ってこの家に来たのでしょうか。同じ出来事を書いているマルコによる福音書1章29～34節、ルカによる福音書4章38～41節には、その日イエスが会堂からこの家に来た（その日は安息日であった）と書いています。人々は、安息日の終わるのを待って、夕暮れに来たのです（一日は、夕方から始まる）。安息日の規定には、労働の禁止などさまざまな禁止事項がありました。しかし、イエスはその安息日の規定を破って、しゅうとめを癒したのです。

イエスは山の上で人々に「悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。」（マタイによる福音書5章4節）と教えた後、山を降り、律法の規定を破って、重い皮膚病の患者にさわって癒し、異邦人である百人隊長の僕を言葉で癒し、ペトロのしゅうとめを安息日に癒しました。それは、かつて預言者イザヤが、「彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛み」（イザヤ書53章4節）と告

げた、苦難の僕の到来を表すものでした。

かけがえのないこと

コロナ禍によって気づいたかけがえのないことが、三つあります。一つは、皆で集まり礼拝することの喜びです。二つ目は皆でおしゃべりし、食事をする楽しさ、そして三つ目は皆で祈り働くことの大切さです。しかし、今私たちは、感染予防のため、いろいろな制約に縛られています。こうした制約から解放されることは、コロナ禍が終息するまで、待たなければなりません。しかし、お話をしてきたように、聖書には、イエスが制約（律法）に縛られることなく、病気の人に手を差し伸べて触れ、悲しんでいる人にも言葉をかけて癒して下さることが書かれていました。預言者イザヤは、やがて病と悲しみを担って下さる救い主が来るという神の言葉を伝えて、人々を励ましました。時を経て、イエスは山の上で人々に、イザヤの告げた救い主（苦難の僕）とは自分のことで、あなたたちは、わたしによって幸いと慰めを得ることができるのだと告げられました。「悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。」（マタイによる福音書5章4節）と書いてあるとおりです。

私は、この苦難の僕イエスを救い主と信じるものです。今、コロナ禍にあって、私たちは多くの制約の中にいますが、イエスの名によって祈ることで、病気の人々や悲しみ苦しむ人々に仕えていきたいと思えます。そして、来るべきコロナ禍の終息後、私たちは、これまでの日々において気づかされたかけがえのないこと（礼拝・交わり・奉仕）のために、心を込めてお仕えできることを楽しみにしております。

2021年7月21日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録